慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	周作人と『トロイアの女』：羅念生との交流をめぐって
Sub Title	Zhou Zuoren and Luo Niansheng : the views on "The Trojan women"
Author	根岸, 宗一郎(Negishi, Soichiro)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2008
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 中国研究 (The Hiyoshi review of Chinese studies). No.1 (2008. 3) ,p.69- 88
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12310306-20080331-0069

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

周作人と『トロイアの女』

――羅念生との交流をめぐって

根岸 宗一郎

一九三七年七月、日中戦争が勃発して北京が日本軍の占領下に入ると、多くの知識人たちが北京を脱出した。北京大学における周作人の同僚で古代ギリシア文学の専門家である羅念生もその一人であった。一方、周作人は北京残留を選択し、その後「対日協力」を余儀なくされていく。この時期の周作人に関しては、特に木山英雄『周作人「対日協力」の顛末』（岩波書店、二〇〇四年）において詳細な検討が行われている。本稿はこうした研究を踏まえながら、近年出版された『羅念生全集』[1]に収録された羅念生の証言を手掛かりに、北京残留当初の周作人の一側面を明らかにしようと試みるものである。羅念生によると、北京脱出時に周作人から古代ギリシア悲劇のエウリピデス『トロイアの女』の翻訳を強く勧められたと言う。この『トロイアの女』は、エウリピデスの悲劇作品の中でも特異なものとされている。日本軍による占領という状況下で北京残留を選択した周作人が、北京を脱出する羅念生に『トロイアの女』の翻訳を托したことには、どのような意味が込められていたのだろうか。そこで本稿は、先ず周作人による『トロイアの女』の解釈を明らかにし、羅念生に何を伝えようとしたか、また、羅念生が何を受け取

ったかを考察する。そして、北京残留を選択した当初の周作人の意識を検討したい。

1. 周作人と羅念生の邂逅——二人のギリシア文学者

周作人は一九一七年に北京大学教授となり、九月からギリシア文学史の講義を担当した。翌年、講義録をまとめて刊行した『欧州文学史』[2]の中では、ギリシア文学史が全体の三分の一を占め、中国初のギリシア文学史ともなった。また、周作人は古代ギリシア文学の翻訳を北京大学に着任する以前から続けており[3]、北京大学において周作人は古代ギリシア文学の専門家であった。一九三五年、ギリシアとアメリカへの留学経験をもつ古代ギリシア文学専攻の羅念生が北京大学外文系講師となり、日中戦争勃発までの二年間を周作人の同僚として過ごした。周作人が序を寄せた鄭振鐸編著『希臘神話』[4]が出版される（一九三五年二月）と、羅念生は「評『希臘神話』（鄭振鐸編著）」[5]を「宇宙風」に発表した。この中で羅念生は、古典ギリシア語原典からの素晴らしい翻訳『希臘擬曲』[6]の訳者周作人が、古典ギリシア語原典のギリシア神話の翻訳を完成してほしいと述べている[7]。羅念生は、二〇歳年上の先輩である周作人の古代ギリシア文学翻訳に関する力量を高く評価していたと言える[8]。

一九三七年七月に日中戦争が勃発して北京が日本の占領下に入ると、羅念生は北京を脱出し、香港経由で成都へ向かった。古代ギリシア文学を専門とする羅念生は、北京を去る直前に周作人から掛けられた言葉を一九四一年に次のように回想している。

「また北平（北京：筆者）を出る時に一人の老人から『トロイアの女』を早く訳出するよう指示されたことを

訳者は思い出した。『この悲惨な詩歌は私たちの警戒心を喚起し、私たちの向上心を喚起することができる』と彼は語っていた。[9]」

同年一月に周作人は、日本の傀儡政権である華北政務委員会の教育総署督弁（日本の文部科学大臣に相当する）に就任していた。このため抗日戦争の一拠点である成都で周作人の名を出すことが憚られ、「一人の老人」と述べるに留めたと考えられる。さらに七年後の一九四八年二月、羅念生は「偉大な作品を語る」[10]で次のように述べている。

「この他に、私はエウリピデスの悲劇『トロイアの女』（商務印書館）を翻訳した。私が北平（北京：筆者）を出る時、知堂老人（周作人：筆者）は私にこの脚本を翻訳するよう繰り返し言い含めた。彼はしばしば、これは戦争を描いた、人間性を高めることができる真に偉大な作品であると言っていた。[11]」

エウリピデス『トロイアの女』は、トロイア戦争でギリシアに敗北して落城した直後のトロイアを舞台としている。トロイア前王妃ヘカベを中心に、ヘカベの子ヘクトル王の妃アンドロマケ、王女カサンドラら捕虜となった女たちの悲劇的境遇を描いたものである。周作人は、一九三四年一月に出版された『希臘擬曲』の序文で『トロイアの女』について次のように述べている。

「実を言うと、あのような大家（アテーナイ時代の悲劇作家など：筆者）に対して、私は畏敬の念が強すぎる。エウリピデス（Euripidēs）の『トロイアの女』（Trōiades）を読んで、（訳したいという：筆者）気持ちが起

こったが、いまだに気に掛けたままである。」[12]

翌一九三五年に同僚として来た羅念生は、アメリカ留学中の一九三三年にエウリピデスの悲劇『タウリケのイピゲネイア』を翻訳した経験を持っていた[13]。周作人にとって羅念生は『トロイアの女』の翻訳を任せられる格好の同僚であったと思われる。羅念生は一九四一年に『トロイアの女』の翻訳を完成し、太平洋戦争勃発以前に原稿を香港の商務印書館に渡す。しかし、一九四一年一二月に太平洋戦争が勃発して香港も日本軍に占領されたため出版が見送られ、一九四四年にようやく重慶商務印書館から出版された[14]。

周作人はかつて一九二四年八月、「トロイアの女」（原題：忒羅亜的婦女）を「小説月報」第一五巻第八号に発表し、エウリピデス『トロイアの女』を紹介している。この号の「小説月報」は、第一次世界大戦勃発から一〇年目にあたり、反戦の特集を組んでいる。茅盾「欧州大戦与文学」、傅東華「非戦文学砕錦」などとともに掲載されたのが、周作人「トロイアの女」である。この文章は、反戦的性格をもつエウリピデスの悲劇『トロイアの女』の紹介であるが、作品の翻訳も一部含まれており、中国最初のギリシア悲劇の翻訳でもある。周作人が執筆の際に参考としたのは、ギルバート・マリー[15]の“Euripides and His Age”[16]と“The Trojan Women of Euripides”[17]である。前者はエウリピデスの伝記および作品研究であり、後者は悲劇『トロイアの女』の英語韻文による翻訳である。周作人は前者の第五章と後者の“Introductory Note”に拠りながら論を展開している（以下、前者をマリー書①、後者をマリー書②と略す）。そこで次節からは、これらを参照しながら周作人「トロイアの女」において、周作人が『トロイアの女』に何を読み取っていたかを考察したい。また、一九四四年に出版された羅念生訳『トロイアの女』には、訳者引言として詳しい解説が収録されている[18]。この『トロイアの女』訳者引言とも対照しつつ、周作人が羅念

生に何を伝えようとし、羅念生が何を受け取ったかを考察する。

2. 『トロイアの女』とメロス島事件

周作人はマリー書①の論の流れを踏まえ、『トロイアの女』の成立に関わるとされる、紀元前四一六年のアテーナイ軍によるメロス島征服から語り始める。メロス島の人々は、アテーナイのライバルであったスパルタと同じドーリア系で、非武装中立を貫いていた。これに対しアテーナイは従属か戦争かの二者択一を迫り、メロス側が従属を拒んだため、武力制圧を強行した。メロス島の成年男子を皆殺しにし、婦女子は奴隷として連れ去った上で、五百人の移民を送り込んだのである。この事件は、軍事的・政治的には大きな影響がなかったが、アテーナイの心有る人々に大きな衝撃を与えた。その代表が、歴史家トゥキュディデスと悲劇詩人エウリピデスの二人であった。トゥキュディデスは、その著書『歴史』において二十六もの章を割いてメロス島征服を描いている。この理由を周作人は、マリー書①を踏まえ次のように述べている。

「彼（トゥキュディデス：筆者）はこの事件がアテーナイ衰退の根源に他ならないとした。なぜなら、これはまさしく『過度』(Hubris) という大罪を犯したからであり、その結果は必ず自滅に至る。その上、実際に後日、滅亡を招くことになるシチリア遠征の意図は、今回のメロス島征服の考えと全く同じであった。[19]」

『歴史』においてメロス島征服は、アテーナイ破滅の直前の章に置かれている。征服を繰り返すことで破滅してい

くアテーナイを描くトゥキュディデスが、メロス島征服をいかに重視したかが分かる。一方、エウリピデスはメロス島征服の翌年、紀元前四一五年春、シチリア遠征艦隊の出発準備の最中に、悲劇『トロイアの女』の上演を行っている。この悲劇は、ギリシアの英雄たちの活躍がホメロス『イリアス』にも歌われた、トロイア戦争に取材している。しかし、敗れて捕虜となったトロイアの女性たちを主人公として描き、ギリシアの侵略を非難する内容となっている。マリーは、「エウリピデスが、メロスでの罪について秋冬の間ずっと思い悩んだに違いない」とし、そこに『トロイアの女』の創作動機を見る。周作人は、『トロイアの女』についてマリー書①を踏まえながら、次のように述べる。

「彼は（メロス島征服の：筆者）次の年の春、大艦隊がまだ出発の準備をしている時に、彼の傑作の一つである『トロイアの女』（Tröades）を発表した。これはギリシア連合軍がトロイアを征服したことを語ったものである。伝説の中の最も栄光ある勝利であるが、しかし、彼の語り方は非常に特殊である。彼が手ではトロイアを描きながらも、心ではメロスを思っていたと、私たちは信じる。だからこそ、彼が描いたのは勝利の栄光などではなく、勝利の悲哀であったのだ。[20]」

この悲劇の成立背景にメロス島征服という歴史事実があったと、周作人はマリーの論に基づいて述べているのである。

ところで、羅念生も『トロイアの女』訳者引言で、周作人同様、トゥキュディデス『歴史』のメロス島征服に触れている。

「この劇の物語はトロイアの陥落であるが、しかし、その中で触れられているのはむしろメロス（Melos）の陥落である。この悲劇は、紀元前四一五年に上演されたもので、当日、観衆はこの劇の筋を見て、あの前年冬のメロス戦争を想起しないものは一人としてなかった。劇中の『トロイア』が即ち『メロス』であり、劇中の『ギリシア人』が即ち『アテーナイ人』であることを知らないものは一人としてなかったのである。[21]」

そして、シチリア遠征について続ける。

「この年、アテーナイ人は正にシチリアを攻撃に行くため強大な海軍を準備しているところだった。（中略）その後、シチリアに遠征した海軍は完全に壊滅し、すべての将校が殺され、たくさんの哀れな兵士たちがその石切り場で死んだのである。正に大いなる報いである。[22]」

さらに、次のように言葉を添えている。

「筆者はここまで書いて、眼前のありさまを凝視すると、歴史の車輪は再びその原点に戻ろうとしているように思うのである。[23]」

これを書いた一九四一年当時、羅念生は抗戦の只中の成都におり、「眼前のありさま」とは日本軍の侵攻を指すと思われる。日本軍の侵攻をアテーナイ軍のメロス島征服に重ね、日本がアテーナイの轍を踏もうとしていると、

羅念生は含みを持たせていると言える。羅念生はさらに、抗戦の士気を鼓舞するため、抗日戦中の中国をトロイアに重ねて次のようにも述べている。

「侵略戦争の勝敗には常に無限の苦しみがともなう。しかし、もしも我々が侵略に抵抗するのであれば、勝てば当然喜ばしく、負けても栄光があるのである。詩人（エウリピデス：筆者）は劇の中でトロイア人にとても同情し、彼らの抗戦に同情している。『深謀遠慮の人ならば当然戦争を避けられるだろう。しかしもしも避けようがない時、忠誠を尽くして国に殉じる英雄は不朽の栄冠を戴くに違いない。そして、その時ばかりは、生を貪り死を恐れる臆病者は恥辱を受けるべきである。』[24] 我々は今のような偉大な時期にあって、この脚本を読んだならば更に我々の精神を鼓舞することができるに違いない。[25]」

以上から、『トロイアの女』の背景に、メロス島征服によりアテーナイが破滅への道を辿ったという歴史があったという認識を、周作人と羅念生が共有していたことが分かる。一九三七年の日中戦争勃発でついに全面戦争に踏み込んだ日本の姿を、日本軍の占領下に入った北京で周作人と羅念生の二人は見つめていた。周作人は羅念生と異なって北京残留を選択したが、知日家であり、かつてH・エリスを踏まえて日本を「小さなギリシア」とまで呼んでいた。[26] この時、周作人も羅念生同様に、中国侵攻を繰り返す日本の姿を、侵攻を繰り返す中で破滅していったアテーナイに重ねていたとしても不思議はない。

3. 『トロイアの女』の解釈をめぐって

周作人から羅念生が聞いたという、「警戒心」「向上心」を喚起し、「人間性を高める」という要素とは何であろうか。そこで、周作人「トロイアの女」における『トロイアの女』の解釈を見てみたい。周作人は『トロイアの女』から三つの場面を選択して引用を交えて解説する。劇冒頭部のアテナとポセイドンの対話の場面、中間部の母アンドロマケと子アステュアナクスの別れの場面、そして、後半部の祖母ヘカベが孫アステュアナクスの亡骸を前にする場面である。先ず、アテナとポセイドンの対話の場面について次のように述べる。

「トロイアの守護者、海の神ポセイドン（Poseidōn）が現れ、廃墟に向き合って嘆いている。そこに、ギリシア連合軍の方からアテナ（Athēna）女神もちょうどやって来る。しかし、彼女は態度を変えていた。なぜなら、ギリシア連合軍が余りに淫らな行いや殺戮を行い、「度を過ごす」という大罪を犯したからである。故に彼女も彼らを罰せずには置けず、彼らが『永久に家に帰ることを思いながらも、ついに家に帰り着けない』ようにしようとする。」[27]

そして、マリー書①にも引用されている、ポセイドンがギリシア軍の破滅を予言する歌を引用する。[28]

次に、母アンドロマケと子アステュアナクスの別れの場面。アンドロマケは、アステュアナクスが幼子であるにもかかわらず、トロイア王ヘクトルの子であるために即刻処刑される、と伝えられる。アンドロマケは、胸に抱い

たアステュアナクスに向かい、永遠の別れを前に語りかける。周作人が引用したのはこのアンドロマケの台詞である。周作人はこの引用部分についてマリー書①に拠って次のように述べる。

「イギリスのマリー（Gilbert Murray）教授が『エウリピデスとその時代』に述べたところによると、これは世界のあらゆる悲劇文学の中で最も心痛み見るに忍びない場面である。『これを見て初めて、アリストテレスがエウリピデスを詩人の中で最も悲劇的であると言った評価を、真に理解することができる』。[29]」

周作人はマリーの論に拠り、母と子との永遠の別れの場面を、世界の悲劇文学の最高峰と位置づけていることが分かる。

最後に王妃である祖母ヘカベが孫アステュアナクスの亡骸を前にする場面。トロイアの宿敵オデュッセウスの奴隷となることを定められたヘカベが、幼子にもかかわらず処刑された孫の亡骸を前にし、埋葬の支度をしつつ語る場面である。周作人は、マリー書①から引用し次のように述べる。

「（アンドロマケとアステュアナクスの別れの場面の後：筆者）メネラオスの喜劇のような一場面が間に挟まったその後、再び尋常でない凄惨な場面が現れる。ギリシア人が子供の亡骸をヘカベに返して埋葬させる場面である。一人きりとなった寄る辺ない老婦人が死んだ子供を抱いているのである。[30]」

そして、ヘカベがアステュアナクスの亡骸に語りかける長い台詞を、マリー書②から引用している。注目されるの

は、周作人が引用したこの台詞の直後に続く、ヘカベが埋葬を手伝う捕虜の女たちに語りかける台詞である。周作人は引用していないが、マリー書②の翻訳に拠ると次の通り。

「すべて良いのだ。もしも神が我らを手の中でひっくり返し、無理やり我らの高きものを低く為し、我らの丘を揺るがして塵としなかったならば、我らはこの栄光を手にすることはなかった。我らの悲運が大地と天国への歌として、絶えることない音楽となることもなかったろう。」(31)

この台詞を踏まえてマリー書①が述べている言葉を、周作人は引用している。

「死者からは同情を得られず、神からは助けを得られず、幻を信じることもできない。ヘカベは現実に直面することで、トロイアの激しい苦しみの中にこそ不滅の輝きがあることを発見する。彼女はその時、運命のどん底ではなく、むしろ最も高い頂上にあったと言える。」(32)

悲劇の極限を経験することにより、悲劇の主人公として永遠に名を残すことができる。それ故に、マリーはヘカベが運命の「最も高い頂上」に至った、と解釈するのである。以上が、周作人が取り上げた場面である。ところで、羅念生は、『トロイアの女』訳者引言において、「この悲惨な詩歌は私たちの警戒心を喚起し、私たちの向上心を喚起することができる」という周作人の言葉を踏まえて、反戦的要素を論じている。「警戒心を喚起する」点については次のように述べる。

「この劇が表現しているのは国が亡んだ悲惨な情況である。（中略）この捕虜の女性たちはあらゆる希望を失っており、この世に彼女たちが経験していない災難など他にあるだろうか。私たちはこの有り様を見て、警戒すべきことを知るに違いない。[33]」

そして、一九一五年春にシカゴの劇団が『トロイアの女』を上演して第一次世界大戦への反戦を呼びかけた事実を述べた上で次のように続ける。

「今のような太平洋上が穏やかでない正にこの時、彼ら（シカゴの劇団：筆者）は再びこの脚本を上演するとよい。[34]」

続いて羅念生は「向上心を喚起する」点を述べる。ヘカベがアステュアナクスの亡骸を前に語る場面を挙げ、次のように述べる。

「この（捕虜の女性たちの：筆者）無窮の苦しみは一体何か意味があるのか。老王妃ヘカベ（Hecuba）は苦しみが極まった時、却って少しの栄光を感じるに至る。彼女は語る。『しかし、もしも天の神が我らを奈落の底に落としてくれなかったならば、私たちは名も無く埋もれたことだろう。詩歌の中で名声を得ることもなく、歌っては涙する詩題を後の世の人に残すことも無かったろう。』この詩題は私たちを感動させ、私たちの向上心を掻きたて得るに違いない。[35]」

そして、次のように結論する。

「もしも本当に、アメリカ人が想像したように、この悲劇が戦争を止めることができるならば、老王妃ヘカベが受けた苦しみはこの上ない光栄ではないか。」[36]

戦争の悲惨さを伝える主人公としてヘカベは不朽の名を残し、『トロイアの女』は反戦の力ゆえに不朽の名作となった。そして、日本軍侵攻により苦しみを受けている中国の人々も、苦しみゆえに不朽の名を残すに違いない。苦しみに耐えて抗戦する心を支える作品として羅念生は解釈していると言える。羅念生の解釈は、戦争の悲惨さを知ることで「警戒心を喚起」し、また、悲惨な情況にあっても名を残すことに栄光を見出すことで「向上心を喚起する」というものである。ヘカベがアステュアナクスの亡骸を前にした場面において、ヘカベが悲劇の主人公として名を残すという解釈は、周作人・羅念生ともに共通している。しかし、抗戦の士気を鼓舞する方向に論を進めている点は、周作人とは異なっていると言える。周作人の解釈の力点は、マリー書②の序章に拠って述べた部分に置かれている。周作人はマリーの論に基づき、この悲劇が「ヨーロッパ文学の中で、人類の哀憐の精神を初めて表現したものである」とする。そしてマリー書②から次のように引用する。

「『哀憐は一種の反逆の精神であり』、その手は強者、社会勢力、伝統的規定、そして公認の神を拒む。宗教及び政治上の反抗と殉難の非常に多くは、皆この精神に基づいている。従って、哀憐が与えるものは平和ではなく、むしろ剣なのである。『トロイアの女』は表面上は非戦文学のようだが、しかし、その反対するところは

実は戦争ばかりではない。この作品は、一切の暴力・強迫行為へ宣戦しているのである。愛の文学であり、しかし、一面では恨みの文学でもあるのだ。[37]」

マリーの言葉を踏まえ、「哀憐は一種の反逆の精神であり」、「一切の暴力・強迫行為へ宣戦している」という積極的な非暴力を訴えた作品として評価している。そして、「愛の文学」であるとともに「恨みの文学」でもあるとするように、単なる反戦・平和主義として片付けることのできない要素を見出していたのである。周作人が述べたという「精神を高める」要素とは、この「反逆の精神」としての「哀憐」という要素、そして「恨みの文学」としての要素だったのではないか。周作人が『トロイアの女』に読み取ったものは単なる消極的反戦ではなく、また悲劇の主人公として名を残すことを目指す向上心でもなかった。悲劇に追いやられた者の「恨みの文学」であり、「一切の暴力・強迫行為へ宣戦する」積極的な非暴力の反戦の精神を歌った文学だったのである。

羅念生は、『トロイアの女』翻訳にあたり、周作人が用いたマリーの英訳本（マリー書②）も参考としている。[38]そして、周作人同様、マリーの序文を踏まえて、「これは人類への同情を表現した、文学史上最初の傑作であり、もっとも意義のある脚本であり、人間性を高めることができる」と述べている。しかし、マリー書②の序文に述べられた「恨みの文学」についての叙述には触れていない。羅念生は、戦争の苦しみの面に対する警戒心、悲劇の主人公として名を残すことを目指す向上心を述べた。しかし、『トロイアの女』は「恨みの文学」だからこそ精神を高める作品であるという周作人のメッセージを、羅念生は受け取ることができなかったのではないか。

周作人が羅念生に『トロイアの女』の翻訳を促したのは、一九三七年七月に北京が日本軍に占領され、羅念生が

北京を脱出した時である。抗戦区に入って翻訳に取り掛かった羅念生にとって、『トロイアの女』は反戦文学でありつつも、抗戦の意識を鼓舞する要素が強く意識されたと考えられる。一方、抗戦区へ脱出しなかった周作人にとって『トロイアの女』は異なる意味を持ったと言える。木山英雄氏は、一九三五、三六年の段階で周作人が、日本の侵攻に対する中国の敗北を予期した「必敗論」を抱いていたとする。そして、「軍備と民生という近代国家の二大要件から民族の前途を卜し」、「そこでの悲観は、国民党国家の軍・政両面にわたる抗戦遂行能力へのまともな不信」につながっていたことを、木山氏は指摘している。[39] すると、周作人が『トロイアの女』のトロイアに中国を重ねていたとして、特に注目したのは敗北という状況下の人々の姿であったはずである。一九三七年七月、実際に北京が日本軍占領下に入った時、ギリシア軍占領下のトロイアで抵抗のすべもなく苦悩する女たちの姿は、そのまま周作人自身の姿と重なるものとなったと言える。北京残留を選択した当時の周作人の心情に、『トロイアの女』の「恨みの文学」という要素が深い共感を呼んでいたのではないか。

注

（1）『羅念生全集』（全十巻）。二〇〇四年、上海人民出版社。

（2）一九一八年一〇月、「北京大学叢書之三」として上海商務印書館から出版された。中国初のヨーロッパ文学史でもある。

（3）周作人は日本留学中に古典ギリシア語を学び、一九一〇年以来、生涯に渡って古代ギリシア文学の翻訳を続けた。周作人とギリシア文学との関係については拙稿「周作人とギリシア文学――一九二一年における転回を中心に」（「東京大学中国語中国文学研究室紀要」第三号、四五頁～六六頁。二〇〇〇年四月一五日発行、東京大学中国語中国文学研究室）参照。

（4）上下二冊。一九三五年二月、上海生活書店。

（5）「宇宙風」第二〇期（一九三六年七月一日）
（6）一九三四年一月、上海商務印書館。ヘーローダースの擬曲とテオクリトスの牧歌の翻訳。
（7）「聞くところによると、知堂老人はApollodorusの『書庫』を翻訳しているところと言う。この本はギリシア神話集の原書である。彼の訳書が出て初めて、私たちは本物の『ギリシア神話』を手にしたことになる。およそ、『希臘擬曲』（商務）を読んだことがある人は、知堂老人の訳文を賞賛しない人はいないだろう。この神話集は素材もよく、訳書も必ずやさらに美しさを加えるに違いない。」（『羅念生全集』第八巻、三〇八頁）
（8）後に、一九五〇年代にはエウリピデスの悲劇翻訳などで協力することにもなる。
（9）羅念生訳『トロイアの女（原題：特洛亜婦女）』（一九四四年、重慶商務印書館）所収の一九四一年三月二三日付自序。（『羅念生全集』第三巻、二三七頁）
（10）「談偉大作品」。「青年界」新五巻一期、総七七期所収。この中では、当時、獄中にあった周作人を気遣い、次のような言葉も述べている。「ご老人（周作人：筆者）が心穏やかで、鉄窓の下でも筆を折ることなく、ギリシアの小品をたくさん翻訳することを願う。彼の日本化した性格は、偉大な作品を好まなかったけれども。」（『羅念生全集』第八巻、三二一頁）
（11）「談偉大作品」（『羅念生全集』第八巻、三二一頁。）
（12）『周作人文類編8　希臘之余光』（一九九八年、湖南文芸出版社）二〇〇頁。
（13）一九三三年夏、羅念生はアメリカのコーネル大学において翻訳を完成している。訳題は『伊菲革涅亜在陶洛人』。一九三六年、『依斐格納亜』の書名で上海商務印書館より出版。同年にはアイスキュロス『ペルシア人（訳題：波斯人）』、ソフォクレス『オイディプス王（訳題：俄狄浦斯王）』も上海商務印書館から出版する。以後、戦時ながらも、一九三八年にアリストファネス『雲（訳題：雲）』（長沙商務印書館）、一九四〇年にエウリピデス『メディア（訳題：美狄亜）』（長沙商務印書館）、一九四三年にエウリピデス『アルケスティス（訳題：亜爾刻提斯）』（重慶古今出版社）、一九四四年にエウリピデス『トロイアの女（訳題：特洛亜婦女）』（一九四四年、重慶商務印書館）と着実にギリシア悲劇・喜劇の翻訳を続けた。

(14) 羅念生訳『トロイアの女（訳題：特洛亜婦女）』（一九四四年、重慶商務印書館）には一九四一年三月二三日付自序（『羅念生全集』第三巻、二三七－二三八頁）がある。また、一九四三年八月九日付の自跋（『羅念生全集』第三巻、二三八頁）では、次のように述べている。「この翻訳原稿は太平洋戦争勃発以前に既に商務印書館に印刷のため渡した。不幸にも香港が災難に会ったため、今日、再び写して印刷し、更に修正も加えた。」

(15) Gilbert Murray（1866－1957）：イギリスの西洋古典学者、オックスフォード大学教授。

(16) 一九一三年、Williams and Norgate, London。周作人「トロイアの女」において同書に基づいたことが記されている。また、周作人の日記、一九二〇年一月の購入書目に同書が見られる。

(17) 一九〇五年、George Allen & Unwin ltd., London。周作人「トロイアの女」において同書に基づいたことが記されている。また、周作人の日記、一九一七年一一月購入書目に「ユリピデス劇一種、ムーレエ」とあるのが、同書のことである可能性がある。

(18) 羅は一九四一年の『トロイアの女』自序（『羅念生全集』第三巻、二三七―二三八頁）で、訳者引言執筆について述べている。翻訳の底本としたTyrrellの引言は短く、しかも版本問題にしか触れていなかった。そのため、訳者があれこれ資料を探して書きあげるほかなかった、という。また、訳者引言の末尾に「本文参考書」の一冊としてマリー書②が挙げられている。（『羅念生全集』第三巻、二六九頁）

(19) 周作人「忒羅亜的婦女」（「小説月報」第十五巻第八号、一九二四年八月）。マリー書①の対応個所は次の通り。“But we can be sure that Thucydides took the war on Melos as the great typical example of the principles on which the Athenian war party were led to act in the later part of the war ; we can go further and be almost sure that he selected it as a type of sin leading to punishment — that sin of “Hubris” or Pride which according to Greek ideas was associated with some heaven-sent blindness and pointed straight to a fall.”（一一七－一一八頁）

(20) 同上。マリー書①の対応個所は次の通り。“Euripides must have been brooding on the crime of Melos during the autumn and winter. In the spring, when the great fleet was still getting ready to sail, he produced a strange play,

（中略）It was called *The Trojan Women*, and it tells of the proudest conquest wrought by Greek arms in legend, the taking of Troy by the armies of Agamemnon. But it tells the old legend in a peculiar way. Slowly, reflectively, with little stir of blood, we are made to look at the great glory, until we see not glory at all but shame and blindness and a world swallowed up in night.”（一三〇－一三一頁）

マリー書②の対応個所は次の通り。“Melos fell in the autumn of 416 B. C. The Troades was produced in the following spring. And while the gods of the prologue were prophesying destruction at sea for the sackers of Troy, the fleet of the sackers of Melos flushed with conquest and marked by a slight but unforgettable taint of sacrilege, was actually preparing to set sail for its fatal enterprise against Sicily.”（六頁）

（21）『羅念生全集』第三巻、二六四頁。

（22）同上二六四頁。

（23）同上二六五頁。

（24）エウリピデス『トロイアの女』カサンドラの台詞。ギリシア語原典では第四〇〇～四〇二行。

（25）『羅念生全集』第三巻二六五－二六六頁。

（26）周作人は「北大的支路」（一九三〇年十二月十一日作、『苦竹雑記』所収）において「日本は小さなギリシアと呼ばれ、その特色は確かにギリシアに似た部分がある」と述べている（『周作人文類編4　人与虫』七二八頁）。これは、「生活之芸術」（一九二四年十一月）や「藹利斯的話」（一九二四年二月）などで引用したイギリスの性心理学者H・エリス（1859－1939）の“Affirmation”‘St. Francis and others’を踏まえていると言える。「懐東京」（一九三六年九月一六日、『宇宙風』第二五期、『瓜豆集』所収）では、同書から日本人を「時代と風土を異にするギリシア人」と述べた部分を引用している（『周作人文類編7　日本管窺』七二―七三頁）。

（27）周作人「忒羅亜的婦女」（「小説月報」第十五巻第八号、一九二四年八月）。

（28）マリー書①の一七頁、およびマリー書②の一三二頁に見られる。ギリシア語原典では第九五～九七行。

「おまえたちは、何と愚かなことか。

おまえたち、町を踏み荒らした者よ。
神の社を毀ち、
死したる者の静かなる霊廟の
墓を踏み壊した人々よ、
おまえたち自らもいずれは死すべき者なのだ。」

以上は、周作人「忒羅亜的婦女」（「小説月報」第十五巻第八号、一九二四年八月）による。

（29）周作人「忒羅亜的婦女」（「小説月報」第十五巻第八号、一九二四年八月）。マリー書①の対応箇所は次の通り。“This scene, with the parting between Andromache and the child which follows, seems to me perhaps the most absolutely heart-rending in all the tragic literature of the world. After rising from it one understands Aristotle's judgment of Euripides as “the most tragic of the poets.””（一三五頁）

（30）周作人「忒羅亜的婦女」（「小説月報」第十五巻第八号、一九二四年八月）。マリー書①の対応箇所は次の通り。“The action works up first to a great empty scene where the child's body is brought back to the grandmother, Hecuba, for the funeral rites. A solitary old woman with a dead child in her arms;”（一三五頁）

（31）マリー書②の対応箇所は次の通り。

“——All is well.
Had he not turned us in His hand, and thrust
Our high things low and shook our hills as dust,
We had not been this splendour, and our wrong
An everlasting music for the song
Of earth and heaven!”（七二頁）

マリーの翻訳は若干訳し過ぎの感があるが、周作人はこの解釈を踏まえている。ギリシア語原典では第一二四二〜

一二四五行。

(32) 周作人「忒羅亜的婦女」(「小説月報」第十五巻第八号、一九二四年八月)。マリー書①の対応個所は次の通り。"Out of the noise and shame of battle there has come Death the most Holy and taken them to his peace. No friend among the dead, no help in God, no illusion anywhere, Hecuba faces That Which Is and finds somewhere, in the very intensity of Troy's affliction, a splendour which cannot die. She has reached in some sense not the bottom, but the crowning peak of her fortunes."(一二六頁)

(33) 『羅念生全集』第三巻、一二六六頁。

(34) 同上。

(35) 同上。

(36) 同上。

(37) 周作人「忒羅亜的婦女」(「小説月報」第十五巻第八号、一九二四年八月)。マリー書②の対応箇所は次の通り。"This tragedy is perhaps, in European literature, the first great expression of the spirit of pity for mankind exalted into a moving principle; a principle which has made the most precious, and possibly the most destructive, elements of innumerable rebellions, revolutions, and martyrdoms, and of at least two great religions. Pity is a rebel passion. Its hand is against the strong, against the organised force of society, against conventional sanctions and accepted Gods. It is the Kingdom of Heaven within us fighting against the brute powers of the world; and it is apt to have those qualities of unreason, of contempt for the counting of costs and the balancing of sacrifices, of recklessness, and even, in the last resort, of ruthlessness, which so often mark the paths of heavenly things and the doings of the children of light. It brings not peace, but a sword."(七頁)

(38) 訳者引言の末尾に「本文参考書」の一冊としてマリー書②が挙げられている。(『羅念生全集』第三巻、一二六九頁)

(39) 木山英雄『周作人「対日協力」の顛末』(岩波書店、二〇〇四年)、二五頁。